**2016年4月14日 詩編を読もう：知れ、主こそ神であると(詩編100編)**

今週は詩編100編を読む。　讃美歌21の5番の歌詞は、この詩編100編の言葉をほとんどそのまま歌っている。いつものように、気になる言葉、あるいはインパクトのあった言葉や節は何かを挙げる。次に、詩編の作者の気持ちになってどのようなことを詠っているか、考える。そして神は、今の私たちに何を語っているのか、思いを巡らせよう。

詩編 / 100編

1:【賛歌。感謝のために。】全地よ、主に向かって喜びの叫びをあげよ。

2:喜び祝い、主に仕え／喜び歌って御前に進み出よ。

3:知れ、主こそ神であると。主はわたしたちを造られた。わたしたちは主のもの、その民／主に養われる羊の群れ。

4:感謝の歌をうたって主の門に進み／賛美の歌をうたって主の庭に入れ。感謝をささげ、御名をたたえよ。

5:主は恵み深く、慈しみはとこしえに／主の真実は代々に及ぶ。

気になる言葉やインパクトのある言葉、私は3節にある「知れ」を挙げる。

詩編作者の気持ちになって、与えられた詩編を振り返ろう。全体を読んで思うことは、命令形に訳された動詞が多いので、ヘブル語の原文と比べながら、それらの動詞を抜き出しておきたい。　あげよ(1節)、仕え、進み出よ(2節)、知れ(3節)、入れ、ささげ、たたえよ(4節)の7つ。　さて、一節づつ振り返りたい。　主に向かって、全地が賛美の歌、喜びの音を出せ(1節)。　喜んで主に仕え、歌いつつ御前に進み出よ(2節)。　主が神であると知れ、主が私たちを造られたのであり、私たちは主の民、主が養う羊の群れなのだから(3節)。感謝をもって主の門を通り、そして主の庭に入れ、感謝をささげ、御名をたたえよ(4節)。なぜなら、主は恵み深く、約束された慈しみはとこしえにあり、主の真理は代々に絶えることなく続くのだから(5節)。

さて、この詩編の言葉を通し、主なる神は、今日、私たちに何を語りかけているのか思いを巡らせたい。短い詩編だが、主に在って、いろいろな思いがこみ上げてくる。三つのことをシェアしたい。

一つ目は、4月17日の礼拝の福音書箇所は、ヨハネ10章22節から30節。イエスの言葉に、「羊たちは私の声を聞く。私はその羊たちを知る。羊たちは私に従う。」(ギリシャ語から直訳している)という言葉がある。メッセージのひとつの大きなポイントは、「知る」という言葉について。箴言には、神に畏敬の念を持つことこそ知恵のはじまりという言葉があったが、この詩編では、「主が神であると知れ。」と直球を投げるかのごとくに教えている。そして、その主の慈しみ、神の愛、が永遠に続いているのだから、ということを知ってわかるように。

二つ目は、上記に７つの命令形があると書いたが、これは、普段から私が信徒の皆様にお願いしている5つのこととも、共通してくる。　1) 聖書を読む。つまり聖書を読むことで、3節にある「主が神であると知る」　2) 主に祈る。祈ることは主に語りかけることであり、喜びたたえること。1節の「喜びの声・音をあげる」ことであり4節の「たたえる」こと。　3) できる限り礼拝を休まないようにし、何かの奉仕を担当する。　4節にある「主の門を通り、主の庭に入る」ことであり、2節にある「喜んで主に仕える」こと。4）家族、友人、知人を誘う。　3節に、わたしたちが羊の群れであることが詠われており、4節の主の門を通って、主の庭に入ってくるイメージは、礼拝に群れをなしてくるように。5）恵みに応答して捧げる。　5節には主の恵み深さが永遠にあることが詠われており、だから、4節にあるように、感謝を捧げる。

三つ目は、とくに1節の言葉、ヘブル語からの直訳に近いが、「主に向かって、全地が賛美の歌、喜びの音を出せ」とあるのは、毎週日曜日の礼拝の時だけではなく、普段の各家庭の生活の中で、賛美の歌、喜びの音を満たすように、主なる神が勧めてくださっているように思う。　いまは、さまざまな家庭音響機器が普及しているし、また、さまざまな楽器が経済的な価格でも提供されるようになっている。　生活環境の中に、音楽をとりいれている中で、ぜひ、主に向かって、喜びの声、喜びの音で満たすように導かれているように思える。　4月24日に予定されているChildren Concertがその一助になればと祈り願いつつ。

アーメン

安達均

PS 熊本で大きな地震があったようだ。大江教会の皆様のことを祈りに覚えつつ。